



写真：佐川 憲一郎

…花の散るらむ

佐川 憲一郎

「ひさかたの光のどけき春の日にしず心なく花の散るらむ」紀友則の句を思い浮かべながら、教室の窓越しに校庭の桜の花びらが風に舞うのを見ることがたびたびあった。

桜は、風景写真の被写体として絶好である。しかし、桜の開花時期は学校では一年で一番忙しい時期となる。

三月下旬は卒業式・修了式。春休み中は職員の間で異動があり職員室内は慌ただしい。四月になれば始業式・入学式があり先生方はてんてこ舞い。この時期に風景写真を撮りにあちこちと出かけることは難しい。落ち着きだした中旬になって、桜の開花がやや遅れる福島県三春地方に撮影に出かけることが多い。ここは枝垂桜の巨木があちこちに点在していて、被写体に恵まれている。

桜を撮って美しいと思える時間帯は日の出の後であろうか。昼は花びらが白飛びして作品にならない。桜は夜でも咲いている。最近、暗闇の中、LEDライトを使いライトアップしながら長時間露光の撮影を試みている。幽玄な自分だけの桜が撮れるのである。また、湖畔や池畔に咲く桜はまたとない被写体になる。水面への映り込みや散り浮く花びらがドラマを演出してくれる。

掲載の写真は、大中町の通称「根岸のため」での撮影である。散った桜の花びらが、水底から顔を出した睡蓮の幼葉の周りを取り巻いて、喜び合っているようだ。水面は、池畔の柳の若葉を映して、季節の移ろいを見せている。曹洞宗の僧侶良寛和尚の辞世の句が脳裏をよぎる。「散る桜残る桜も散る桜」

写真は、二度と同じ姿を見せることの無い風景をしばし留めてくれる。

常陸太田の神社を巡る

五十嵐弘・鴨志田弘子・黒澤貴子・高橋靖浩

古くから日本人の生活と密接に関わってきた神社。大きな社殿を構え多くの人に知られている有名な大社、小さな祠や石のご祭神だけを祀っている地元の人にしか知られていない神社などを含めると、茨城県内には二千五百社以上、常陸太田市内には、百社以上しかない」等珍しい神社があります。そして、その神社のいわれ等には不思議な物語があり、祀られているご祭神にはとても人間くさい一面もあります。又、人里離れた山中にひっそりと鎮座する神社の森には、癒しの力を感じることもあります。そんな神社を巡ってきました。

あけせ 明世神社

亀作町一三四九

【祭神】伊邪那岐命（イザナギノミコト）

伊邪那美命（イザナミノミコト）

【創建】不詳

一の鳥居と二の鳥居を持つ広い境内は、こんもりとした鎮守の森に囲まれ、カゴノキが森の中にあります。

元々は、悪所明神と称していたといわれています。又、元禄四年に光圀公が「これ上世の物、決して後世の及ぶところに非ず」と、祀られていた神体木造を特製の函に納めさせたとはいわれています。

祭神のイザナギとイザナミは国と神様を造った神様といわれています。



拝殿



一の鳥居

そが 素鷲神社

里川町五二四

【祭神】素盞雄尊（スサノオノミコト）

【創建】元禄八年（一六九〇）

石段を登ると、立派な注連縄とコナラ、モミ、カエデがからみあつた巨木と、竜のように立ち上つた杉の大木が迎えてくれました。

境内の石塔は、サルオカセ（地衣類）に覆われ、「神社はパワースポットだよ」そういわれたことを実感する雰囲気でした。

いわれはよくわかりませんが、元は日本神話のなかでも有名なスサノオノミコトを祭神とする出雲の「素鷲神社」であることは間違いないと思います。

関馬之充の著書『常北之山水』でも紹介された鎮守の森は、一見の価値があると思います。



拝殿



鳥居

かぶと 冑神社

和久町八五二

【祭神】埴山姫命（ハニヤマヒメノミコト）

【創建】不詳

社名の由来は、天喜五年（一〇五七）、源義家が「前九年の役」の際、ここで休んで冑を石の上に置いたところ、冑が石に変わったことだといわれています。

このあたりは地名も「甲石」といい、石材を採掘していた時代もあったそうですが、冑石観音岩だけは、今も昔のまま残っています。

ご祭神のハニヤマヒメノミコトはイザナミノミコトから生まれた神様で、土の神様といわれています。

又、その土は、特に陶器の原料になる土のことであり、陶器の神様でもあります。



拝殿

あめのしらは 天志良波神社

白羽町一六七〇

【祭神】 天白羽命（アメノシラハノミコト）
【創建】 不詳

急な石段を登ると一度開けた空間があり、さらに石段を登るとスダジイの巨木を含む、こんもりとした鎮守の森にかこまれた境内があります。そこには、古社の雰囲気をもった小さな拝殿が鎮座しています。

創建は不詳ですが、延暦十四年（七九五）坂上田村麻呂が東征の際に白羽の矢を賜ったので社を建てて祀ったという言い伝えがあります。

祭神のアメノシラハノミコトは衣服の神様で、麻で青和幣あわしきを作った神様です。又、麻を植えて、織物を広め、麻模おみ氏の祖神といわれています。



石 段



拝 殿

いわふね 岩船神社

西染町二四五

【祭神】 饒速日尊（ニギハヤヒノミコト）
【創建】 元禄元年（一六八八）三月二十四日

磐舟神社と書く神社もあるそうです。その他に石舟神社（いしぶね）という神社もあります。

名前の由来はよくわかりませんでした。古来、岩や石は「頑丈」「変わらない」という意味合いで使用することがあったので、「頑丈な舟」に由来するのかなと考えましたが、ご祭神のニギハヤヒノミコトは、天の磐舟で天から降りてきた神様と言われているので、そのことが社名の由来と考えるのが普通なのかと思います。

ニギハヤノヒノミコトは天孫降臨で有名なニニギノミコトのお兄さんです。



拝 殿



社 名

かまど 竈神社

上宮河内町一六六六

【祭神】 奥津彦命（オキツヒコノミコト）
奥津姫命（オキツヒメノミコト）
【創建】 不詳

金砂の湯から西金砂山に向かうと、包石集落があります。その集落の上の小高い山に社があり、その奥には見たこともない大きな恐竜の卵の様な丸い石を包むように岩が覆いかぶさっています。その石を「包み石」といい、竈神社のご神体とされています。祭神のオキツヒコノミコトとオキツヒメノミコトはかまどの神様といわれています。

ご神体の包み石まで行くには、民家の敷地を通り、けものみちの様な急傾斜の細い道を歩いて行かなければなりません。今回は、民家にお声がけをし、重装備で登りましたが、女性陣は安全のため途中で引き返してもらいました。包み石まで行く場合には、しっかり準備をして安全第一で行動してください。



包み石までの途中にある小さな祠



包み石

石尊神社

西染町二四七

【祭神】磐長姫命（イハナガヒメノミコト）
【創建】不詳

住所を頼りに社殿を探したのですが、見つけることが出来ませんでした。後日、宮司さんにお伺いし、岩船神社裏側にある石尊神社と社名が彫られた石を見つけることが出来ました。

その時、宮司さんに伺った話では、県内にある石尊神社は、西染と上深荻にある二社だけのことでした。同じ名前の神社ですが、ご祭神は上深荻の石尊神社は、山の神様であるお父さんの大山祇神（オオヤマツミノカミ）、西染の石尊神社は、石の神様である娘の磐長姫命（イハナガヒメノミコト）だと伺いました。



社名が彫られた石碑

石尊神社

上深荻町一七六七

【祭神】大山祇神（オオヤマツミノカミ）
【創建】不詳

国道三九四号線から東へ入ると、すぐに鳥居は見つかりました。その鳥居をくぐり、はるか山頂に本殿はあるとのこと。健脚自慢の方でも足元の準備は怠りなく。宮司さんにお伺いしたのですが、「元々はこの地域の氏神様だったのでは？」等いわれはよくわかりませんでした。ただ、ご祭神のオオヤマツミノカミは山の神様であることから、この地域に古くから根ざしている山岳信仰と結びついているのではと考えました。



鳥居



鳥居のすぐ上にある小さな祠

富士神社

西河内下町八九二一二

【祭神】木花開耶姫命（コノハナノサクヤヒメノミコト）
【創建】不詳

富士神社を初めて訪れたのは、狛犬特集の取材をしていた二年位前の初秋でした。目当ての狛犬はいませんでした。小さな社殿が鎮座する広葉樹に囲まれた境内が、とても気持ちが良い空間だったことを憶えていました。

今回は、冬枯れの季節でしたが、新緑の季節には、とても気持ちの良い空間になることが想像できます。

祭神のコノハナノサクヤヒメのミコトは、「富士山の神様」「花の神様」といわれる美しい神様で、富士山本宮浅間大社の祭神であることは有名です。

上深荻の石尊神社には父であるオオヤマツミノカミが、西染の石尊神社には姉のイハナガヒメノミコトが祀られています。



拝殿



鳥居

長幡部神社

幡町五三九

【祭神】多弓命（タテノミコト）

【創建】第十代崇神天皇年間といわれています。

洞窟の中をくねくね行くような切り通しの道を歩き、椎の太木の林の中にある鳥居をくぐり、登りつめると突然見える空。高台にある境内には長い注連縄、古社の雰囲気があふれる空間でした。又、私たちが取材に訪れた日には、手水舎に「藁苞」がお供えされていました。

藁苞とは、お米の団子、豆を入れて炊いた赤飯を入れる藁で作った入れ物です。二月最初の午の日に行

われる、稲荷神社のお

祭り「初午」

では、豊作を祈願して藁苞をお供えします。



藁苞

鷹房神社

小目町一

【祭神】健羽槌命（タケハツチノミコト）

【創建】康平年間（一〇五八—一〇六四）

社伝によると、一〇五七年源頼義が奥州征伐の折にこの社を建て、菅田別命を祀ったのが始まりとされています。社名の由来は、矢篠の群れに鷹が飛来して止まり、くわえてきて稲穂の穂をこの地に落とした。村人がその穂を自分の家の穂と合わせて使ったら豊作をもたらせたので、その矢篠をご神体とし、社名もそれを由来にしたと言い伝えられています。現在も、その矢篠はご神体として大事にされています。

タケハツチノミコトは織物の神様といわれていますが、武勇にも優れた神様であつたとされています。

白羽・機・小目地区には、織物にまつわる神様を祭った神社（天志良波神社・長幡部神社・鷹房神社）があり、機の名は機織りに結びつく地名であることから、古代史ファンには興味深い地域ようです。



鳥居



ご神体の矢篠



拝殿

薩都神社

里野宮町一〇五二

【祭神】立速日男命（タチハヤヒノミコト）

【創建】大同元年（八〇六）

「常陸風土記」に記述されていることから、とても永い歴史があることがわかります。

タチハヤヒノミコトはこの地域の神様でありましたが、とても穢れを嫌う神様であつたそうです。人が生活をすれば穢れは出てしまうもので、この穢れが多い里の地よりも清浄な高い山へお移りになって

くださいとお願いし、一時、賀毘礼の峰（日立市入四間町の御岩山）へ移って頂いた、という意味の記述が、常陸風土記にあるそうです。

薩都神社には、平安時代中期の代表的歌人藤原公任が選んだ三十六人の歌人からなる三十六歌仙と、六人の平安歌人からなる六歌仙の歌仙絵が奉納されています。三十六歌仙と六歌仙の歌仙絵がすべて揃っていることは、とても珍しいことです。



歌仙絵



拝殿

水府中学校

武子 勝徳

長い坂道を登った丘にある水府中学校は今年で創立五十二年目になります。生徒数は一年生二十一名、二年生が二十九名、三年生が二十名の計七十名、生徒会長の椎名優宜さん、副会長の大森隼人さん、運営委員の木梨翔太さん、小林純輝さんにお話を聞いてきました。



んさん
ささん
宜人太
優隼純
名森梨
椎大木
3年3年
3年3年
2年2年
右列左
前列後
列列

「み・そ・あ・じ」

水府中学校では小学校と連携して、「み・そ・あ・じ」と言う共通のローガンを掲げています。「み」は、身だしなみ「そ」は、掃除「あ」は、挨拶「じ」は、時間を守ることです。特に「挨拶」は生徒会を中心に週二回の「あいさつ運動」を行っています。生徒全員が大



きな声で元気に挨拶をし、コミュニケーションをとることで、一年生から三年生までわけ隔てなくお互いに表現しあえる良い環境になっています。

CCM

全校ボランティアでは、全校生徒がCAN隊（空き缶回収）、CLEAN隊（校内清掃）、MUSIC隊（介護施設誠信園訪問）に分かれてボランティア活動を行いました。ボランティア活動には心の優しさ人とふれあう気持ちが伴い、誰かの何かの役に立っているという達成感を生徒全員が味わう事ができました。特に誠信園では、音楽の力により、今まで腕が全く動かなかった方が、少しではありますが音楽に合わせて腕を動かしてくれました。

小中一貫校に向けて

水府中学校は、平成三十年に小中一貫校になります。先輩がたの伝統を守りつつ、より一層人を思う気持ちを大事にして、活気のある新しい学校にしていきたいと意気込んでいます。



町田焼に熱中する生徒たち



常陸太田県北地ばやし保存会

黒羽 文男

常陸太田県北地ばやし保存会は、昭和三十二年に発足して以来、古くからお囃子の本流である「おっしやい」「四丁目」「通り囃子」「火男おかめ」など屋台囃子を中心に太田の祭囃子の良き歴史と伝統を守り育てるべく活動をして来ました。お囃子の艶やかな三味線、落ち着いた笛、軽やかな鐘の音そして強い響きの太鼓の音色がいまって奏でる響きは、人々を元気にする力を秘めているように思えます。会員の黒羽義信さんは、「お囃子の練習で、太鼓、笛、かね、三味線の奏者が上手くとけあつて演奏ができた時が醍醐味です」と言います。そのためには、会員同士が積極的に打ち込める雰囲気づくりにも努めているそうです。



新入会員を募集しています

- 練習日／毎週水曜日19時から20時
- 練習場所／木崎町集会所
- 会費／年間6000円
- 入会希望者連絡先
会長 吉原文男 72-2225
常陸太田市教育委員会文化課 72-3201

常陸太田の地名話25

なかぞめ ひがしぞめ にしぞめ
中染・東染・西染

『常陸太田市中染町・東染町・西染町』

川松 博



国指定文化財中染阿弥陀如来立像

むかし、ここは曾目村と呼ばれていた。山入の乱のとき曾目村の十八人の武士たちは、領主であった佐竹十六代義舜公という殿様のために、命がけで戦に協力したので戦いに勝つことができた。そのお礼に殿様は租税を十年間免じてくれたので、この村のことを租免（そめん）村とも呼ばれるようになった。それから村人のくらしは大変豊かになり、住む人も多くなってきた。

そこで、村人たちは相談してこの村を三つの村に分けることにした。村の真ん中を中曾目、東の土地を東曾目、西の土地を西曾目と呼ぶようになった。

それから後になって、村人たちはむずかしい字では困るということで「染」の字をつかうようになったとのことである。

〈参考文献〉「水府村史」「水府村の歴史散歩」「水府村の民話」

「思い出の絵本」

『おこだでませんように』 石川ひとみ (新宿町)



私は、保育士という職業柄、絵本を毎日保育園の子どもたちや三人の我が子に読んできました。私が書店で選ぶ絵本は、昔からある有名な話や優しい絵のタッチの絵本が多い気がします。

そんなある日、たまたまテレビから流れてきた『おこだでませんように』の絵本の読み聞かせ。絵の力強さと読み聞かせの声に、目を奪われました。絵本の主人公は、小学生の男の子。物語は、男の子の心の声がかかれています。

「ぼくはいつもおこられる。いまでもがっこうでもおこられる。」テレビからこの一文が聞こえてきた時に、すぐに長男の顔が思い浮かび、ドキッとしまし

た。物語が進むにつれて、ぐっと胸が締め付けられたのを覚えていいます。男の子は、妹が泣いた時、喜ぶと思っていたことが裏目に出た時、友達とけんかした時、ふざけて友達を笑わせた時：いつも母親や学校の先生に怒られてしまいます。男の子なりの考えがあつての行動も、うまく言葉で伝えられず、心の中で葛藤していきます。そんなモヤモヤした気持ちの中、学校で書いた七夕の短冊。

「おこだでませんように」(おこられませんが…)：この短冊を見て、男の子の思いに、先生が気付く母親に伝えます。そして、先生は涙を流し、母親は男の子を抱きしめます。男の子はその日の夜、たなばたさまに感謝をし「たなばたさまありがとう。おれいにぼくもつとも(と、ええ)になります。」と布団に入るのです。

テレビの読み聞かせが終わる頃には、涙が…。私は、いつも注意しがちな息子の気持ちを理解していないかもしれないと反省させられました。そして、その日のうちに、書店で一冊だけ

あつた、普段はなかなか手に取ることのない力強い絵のタッチの絵本を購入していました。

この絵本が家に来たら三年が経ち、息子は、この春三年生になります。相変わらず注意すること多いですが、この絵本を読む度、子供の話に真剣に耳を傾ける大切さを感じ、子どもたちを抱きしめたくくなります。

機会がありましたら、ぜひ読んでみてください。

『scone and coffee r.』

ちょっぴり

ひといき

塩原慶子



街のにぎやかさからちよつと離れた場所にあるカフェ「scone and coffee r.」

「夫が生まれ育ったこの場所、豊かな自然に包まれたここが大好きだから、いつかここに大好きなカフェを開きたかったんです。」とオーナーの坂倉さん。アイアンの取っ手がついた引き

ほっとひといき

『ショウジョウバカマ』

安嶋隆

北海道から九州までの、やや湿った場所に生える多年草です。葉は細長く、根本から多数出て平らに広がるので、花がなくても目立ちます。花はその中から出て先端に横向きにつきます。花の色は淡紅色、紫色、白色と変化に富んでいます。花期は三月ですが、

花が終わった後もそのまま残り、夏にも緑の花が咲いているように見えます。



ショウジョウバカマ(ユリ科)

名前は、花が赤いのを猩々(しょうじゅう)の斜面、谷津田の土手斜面などに記録があります。早春にひっそりと咲くので、気づかないうちに花が終わってしまいます。

戸を開けると、隅々までオーナールのセンスで磨かれた素敵なお客さんが広がっています。丁寧な淹れられたコーヒーとおいしいスコーンをいただきながら、窓の外をゆつくりと流れる時間を楽しむ、優雅な時間におさわしいカフェが誕生しました。

ーお知らせー

いつもフォonzをご愛読いただき、ありがとうございます。フォonzも今年度で17年目を迎えますが、現在の年間4回発行から年間2回発行に変更となります。

発行回数は少なくなりますが、これからもフォonzらしい視点で、皆様に喜んでもらえる紙面づくりに努めてまいりますので、これからもよろしくお願ひします。

フォonzネットワーク一同

新太田点描 18

げんそうこちゅう 幻窓湖中の奥羽日記から

水戸城下に居住していた俳人幻窓湖中が門人の規外、太民の二人を伴って俳聖芭蕉の「奥の細道」を慕い下市の居宅を発って奥羽地方の旅に出たのは、文政十年（一八二七）四月十九日、五十一歳の時であった。

この旅で湖中は『三月越奥羽日記』と題する紀行文を書き残している。現在、写本は常陸太田市立図書館に所蔵されている。

それによると水戸から太田を経て棚倉街道を通り常陸国境の明神峠を越えて陸奥大坂に入り福島、米沢、仙台・松島等の名所旧蹟を巡り、各地で句作を楽しみながら在所の俳友との親交を深めるなどしている。また復路は陸前浜街道を磐城から常陸国に入り、六月二十二日に水戸の自宅に帰って来ると云う足掛け三カ月に及んだ大旅行であった。

ところで、幻窓湖中は俳号で本名を岡野重成と云い通称を庄八と称した。安永五年（一七七六）三月、水戸藩士岡野莊次衛門重寿の次男として生まれた。兄が早くに亡くなったので、当然家督を継ぐはずであったが、十六歳の時に患った脚疾のため藩に仕えることを断念し俳諧に専念すると共に、囲碁を趣味として、天保二年（一八三二）二月晦日に五十六歳の生涯を閉じている。

ここでは旅立ちから国境迄の記述を現代風に掻い摘んで紹介しよう。

芭蕉は四十六歳の時奥羽の旅をしたが自分もそのころから頻りに旅に憧れていたが五年以上も経ってしまった。漂泊の歌人西行上人をまねた訳ではないが思い切って卯月十九日に立出した。同行者は門人の規外と太民の二人である。那珂川の岸辺で見送りの人たちと別れる。

松島の蚊に喰はるるぞうらやまし
と、俳友の杜年が送別の句をくれた。

けふからはわが野山なりほととぎす

の心境である。田彦の宿まで送ってくれた人もいる。沢、堤を過ぎて額田に着く。……

昼過ぎの長き卯月の日ざしかな

太田に至る尾花庵に着く。

露の葉に菓子もる庵の奢かな

二十日から二十六日迄尾花庵に留まり、この間仲間たちと俳諧の題を探って遊ぶ。方居が句帳を持ってきて序を書いてくれと云うので書いてやった。……

二十七日、尾花庵を出て里川沿いに陸奥に赴く。

家作るもくろみいくつ夏の山

町屋を過ぎて玉簾の瀧に至る。

夏ありて僧も住むやら玉簾寺

これから先は雑役馬を使う。

馬の子はかはゆきものよけしの花

折橋に至る。問屋の向かいの家の主人は心優

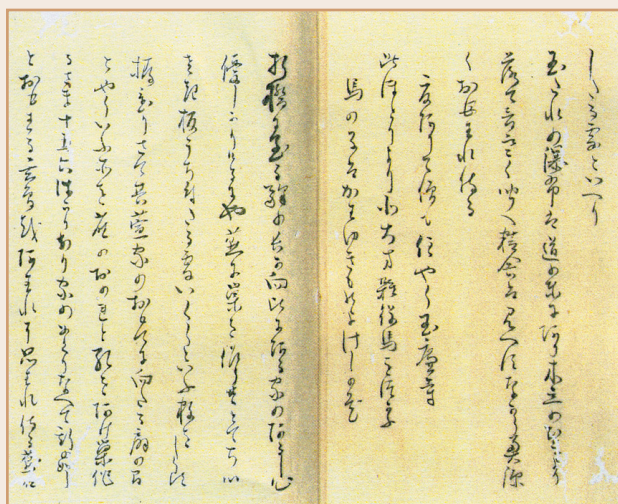
しいのであろう。燕が軒先に巢を作り易くするためにと、小さい板を数多打ち付け置いている。その萱屋根の表側を雀が勝手に穴をあけて燕を追出し、巢を自分のものにしていく。燕が気の毒におもえてならない。燕らの鳴き声とその巢の廻りから賑やかに聞こえて来る。この家の主人の心使いが返す返すもいとおしく思はれた。

鳥の巢に空をしまるる四月かな

大中、小中、徳田を過ぎて境の明神坂を越えて陸奥に入る。

見かえらじ麦の穂まねく坂の下

拙い意識で申し訳ないが湖中の心根を汲み取ってもらえるだろうか。（吉成英文）



奥羽日記（内容の一部）